

「なると金時」の歴史と地域ブランド化への取り組み

鳴門藍住農業支援センター 課長補佐 南 利夫

I. 産地の歴史

“なると金時”の主産地である鳴門市の海岸部では、古くからサツマイモ栽培が盛んであった。明治前期には、鳴門市史（中巻）によると市内だけでも265haの栽培面積が確認されている（写真1）。

明治の初めに、鳴門市里浦出身の西上国蔵が、長崎県大村から来た船に荷積みされていた甘藷（源氏系統）の中から優良な系統を選び出し、“アイノコいも”と命名し、関西で好評を得、産地としての名声が上ったと言われている。なお、“アイノコいも”という呼び名の由来は、鳴門海峡付近を通る、蒸気と風で走る「アイノコ舟」からこの名前をとったと伝えられている。“アイノコいも”は、関西で“撫養いも”とも呼ばれていた（写真2）。

鳴門地方のサツマイモは、それ以降、明治から昭和にかけて、塩害で作物ができなかった低湿地（坪屋）に、製塩業で燃料として使われていた石炭の燃えがら「石炭殻」



写真2 西上国蔵頌徳碑
鳴門市大毛島

を敷き、その上に周辺の海岸部から客砂して出来た砂地畑で栽培が広がっていった。

現在の鳴門市を中心に近隣の徳島市、松茂町、北島町を含む2市2町で、約1,000haの産地規模となったのは、昭和40年代になってからである。この2市2町の砂地畑で生産されたサツマイモは“なると金時”の地域団体商標で、関西をはじめ、関東・中国地方まで広く販売されている。“なると金時”の平成19年度販売額は77億円で、徳島県の野菜販売額の17.5%を占め、にんじんやスダチなどとともに徳島県を代表するブランド農産物になっている。



写真1 ほくほくした食感が特徴の“なると金時”

Ⅱ. “なると金時”のブランド化への取組み

1. ウイルスフリー化で健全な苗生産

当産地では昭和30年代に、現在の品種「高系14号」（“なると金時”）が導入され普及していった。ところが、昭和60年頃になると、ウイルスが原因と考えられる粗皮症状が多発し、品質の低下が見られた。このため、徳島県農業研究所では、無病苗の育成のための研究を行い、ウイルスフリー化技術を開発した。その研究成果を生かして、JA松茂では、農協独自で増殖施設を建設しウイルスフリー苗の生産に取組んだ。この結果、全国に先駆け産地全体でウイルスフリー苗の普及が進んだ。

これに対応して、全農とくしまが関連企業と共同で、ウイルスフリー苗専用肥料を開発するなど、官民一体となった技術開発が行われた。

2. 「手入れ砂」の投入

“なると金時”の品質を左右する大きな要因は、「砂」である。当産地は、海岸部に近い場所にあることから、強風や豪雨により砂が飛散、流亡して消失することや、長年の耕作で砂が摩耗し微細化することなどで、栽培に適する砂の条件を維持できなくなることが大きな問題になっていた。そこで産地では、この問題を解決するために3～5年に1度の割合で、栽培に適する粒径の砂を「手入れ砂」として、供給（30～50立方m／10a当たり）し、砂地の栽培環境を整えてきた（写真3）。徳島県農業研究所においても、高品質生産を行うための砂の条件を調査研究し、「手入れ砂の基準」を作成してサツマイモ栽培農家に示してきた。

この「手入れ砂」も、近年、近隣海域で海砂の採取が禁止され、確保が難しくなっている。現在、国土交通省との協議の結果、平成19年度から5年間を期限として、吉野川流域の砂がサツマイモの「手入れ砂」と



写真3 「手入れ砂」を入れた砂地畑

して利用することに限り、試行的な採取が認められた。「手入れ砂」の確保等については、今後も引き続き産地の課題になっている。

3. 水源の確保

当産地は、主要河川からも遠く取水できる水源がないことや、栽培期間である4～8月の降水量も500mm程度と少ないことから、サツマイモ以外の作物が作れなかったことも、この地域にサツマイモが根付いた一つの要因である。しかし、干ばつに強いサツマイモといえども挿し苗時の水については、作柄に影響を与える大きな要因でもあり、渇水年における水源の確保は長年の産地の課題であった。



写真4 スプリンクラーで散水するサツマイモ畑（鳴門市里浦町）

平成20年に国営吉野川下流域農地防災事業により、水源がなかった里浦地区の砂地畑（300ha）に灌水施設が設置された。これにより、渇水時でも安定した収量や品質を確保できるようになった。徳島県では、この整備を契機に「水管理指針」を作成し、水の有効利用を推進している。また、確保された水は、サツマイモの後作である大根の作柄安定や土壌消毒時の揮散防止などにも利用され、産地の生産力向上に大きく貢献している（写真4）。

4. 安全・安心への取組み

1) 「フェロモントラップ」の集団設置で 虫害防除

鳴門市史などによると、昭和35年に当産地でもハスモンヨトウ等の害虫が大量発生し、サツマイモも甚大な被害を被った。この時、全国で初めて農作物の防除のために自衛隊が出動した。また、子供たちに害虫の防除を手伝ってもらった。

産地ではこの過去の苦い経験から、農協間で連携して「フェロモントラップ」を地域全体に設置し、害虫の発生数をコントロールしてきた。こうした取組みにより、害虫の発生量は抑制され、必要以上に農薬に頼ることのない防除体系が確立されている。

2) 黄色の目印で安全確認

平成18年に施行されたポジティブリスト制度を契機として、農薬の適正使用に注意を払っている産地も多い。当産地では、この制度ができる以前から多くの安全対策に取り組んできた。特に、JA里浦では早くから収穫期のは場への農薬飛散を回避するために、隣接する圃場の生産者への合図として「黄色のひも」の目印を畑の隅に立てることを申し合わせてきた。生産者同士がお互いに言葉を交わして行いにくいコミュニケーションを、この目印を立てることで



写真5 農薬飛散の安全確認用目印の「黄色のひも」



写真6 農薬飛散防止用ドリフトマスターの導入

円滑に進めている（写真5）。

また、飛散防止のフードが着いた防除機器（ドリフトマスター）を率先して導入するなど、ハード整備も併せて行ってきた（写真6）。こうした取り組みにより、農薬の飛散事故や産地内での大きなトラブルもなく、安全で安心できる農産物生産が行われている。

Ⅲ. まとめ

当産地では、平成19年に全農とくしまが管理する“なると金時”の地域団体商標を取得している。また、各農協においても、JA里浦は“里娘”、JA松茂は“松茂美人”、JA徳島市は“甘姫”の商標をそれぞれつけて、サツマイモのPR販売に努めている。

近年の景気の停滞などにより、ブランド



写真7 JA里浦管内で京都の小学生とサツマイモ交流体験授業

農産物は、かつてのような高値で販売ができず苦戦しているところもある。今後、さらに栽培技術面でのレベルアップを図るとともに、一般消費者や将来の消費を担う児童・生徒などにも“なると金時”の良さを知ってもらう交流活動などを実施し、新たなファン作りを行いながら、ブランド力アップに向けて取組んでいる（写真7）。

注：「鳴藍がんばる農業応援ネット <http://naruai-agri.betoku.jp/image/vol19.pdf>」のホームページで掲載の「さつまいも通信」もご覧下さい。